
やがて花咲く彼女たちへ

あやし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やがて花咲く彼女たちへ

【Nコード】

N5331Y

【作者名】

あやし

【あらすじ】

プロデューサー、それはアイドルと共に歩む者。しかし現実はいかに、マネジメントから営業、掃除に洗濯、炊事に買い出しまであらゆることをこなす（強制）万能営業マンとしての日々が続く。彼に本業であるはずのプロデューサーをする日は来るのだろうか。TV版アイドルマスターのプロデューサーである彼に（一応）スポットを当てた作品……になる予定です。

第一話 だから営業ではないと（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第一話 だから営業ではないと

『 営業 』

それは男の子達の永遠の憧れ。

だが、その頂点に立てるのは、ほんの一握り……

そんなサバイバルな世界に、

1人の男の子が足を踏み入れていた。

※ ※ ※

「……ん？」

今、何かおかしなテロップが流れた気がする。しかも肩書きが間違っていた気もする。オレは営業ではなくプロデューサーだ。まあ仕事内容としては実質的に変わらないが……いやいや。そうではなく。

「ああ、すみません。ええっと今度の土曜日ですよ？ はい、はい……大丈夫です。如月千早と天海春香ですね」

飛びかけていた集中力を再び受話器に戻す。大事な電話中なのに意識が飛ぶってのは疲れているのかなオレ。今度の休みはゆっくり休もう……って次の休みっていつなんだろう。と思いつつ電話越しの打ち合わせは終了し、静かに受話器を戻して一息つく。

「お仕事ですか？」

ふと気配がして顔を上げると、765プロの事務員である音無小鳥さんが熱いお茶の注がれた湯飲みを運んできてくれていた。

「はい、先週顔出しておいたかいましたよ」

湯飲みを受け取り、一口啜る。765プロのお茶の味にも慣れてきた。早くもくたびれ始めている自分の手帳に書込み、そして同じ事をホワイトボードにも書き込む。

『12…00～14…00 さくらTV、第五スタジオ。千早、春香』

白いホワイトボードに黒い領域がちょっとだけ増える。まだまだ予定が埋まっていない日が多いが、某社の洗剤並に白さが眩しかったちよっと前に比べれば格段の進歩である。うんうん。

「相変わらず白いわね」

自己満足に浸るまもなく、痛烈な一言が後頭部を叩く。可愛らしい中にトゲがあり、それがまた魅力なのだとかどうとか。

「お、お帰り伊織」

心の中で後頭部を擦りながら振り返れば、ブリ……水瀬伊織がソファにその小さい身体を沈めていた。仕事を終えて戻ってきていたのか。ツンとすませて何だか不機嫌オーラが漂っている。続いて、伊織とはいろいろな部分が対極にある女性、三浦あずさがおっとりとした足取りで現れて挨拶をした。

「あらプロデューサーさん、おはようございますう」

「おはようございます、あずささん。今日の仕事はどうでしたか？」
心の中で手帳に書かれた予定表を捲る。今日は早朝から単発ながらドラマの撮影が入っている。伊織、あずささん、真の三名が参加。真はその後にダンスレッスンが入っているから直行している予定だ。

「はいー、皆さんいい人ばかりで楽しかったですよ」

あずささんが微笑む。それだけで周囲の空気が、いや時間がゆっくりと流れ始める。ほんわかとしてゆったりとしたフィールド。なるほど、この空間において迷子などというものは些事ではなくなり、む

しろ必然なのであり迷子という言葉の定義すら揺らいでい……

「はっ?!」

ハッと我に返り、思わず身構える。まさか今のは何かの攻撃か？

ゴゴゴゴという幻聴が響いてきそうな……。

「フンっ、なにデレデレしちゃってるのよ。これだから男っていうのは」

「……たはははっ」

伊織のジト目に引きつった笑いを浮かべる。いやデレデレしてた訳じゃないのだが、言い訳するとドツボるので笑い誤魔化す。

「とりあえずお仕事ご苦労様。今日の予定は……午後からレッスンだけか。どうする？　もしよければ昼飯でも一緒にどうだ？」

「お昼……ねえ」

伊織はちらりと視線をこちらに向け、ツンと閉じる。

「まあ、どうしてもというのなら付き合ってもいいわ。でもカポッテラ限定ね」

「うぐっ、ま、まあいいだろう」

カポッテラとは765プロの近くにあるイタリア料理店の名前である。ちなみに伊織が指名するという点から、価格は察して欲しい。まあここに居る面子に奢ったとしてもオレの財布で何とかするのが、伊織らしいといえbraしいのだが。

小鳥さんが経費で落としましょうか？と聞いてくるが、丁重に断る。もちろん正当な飲食費で通用する範囲だが、ここは矜持の問題である。今のはあくまでオレ個人の気持ちなのだから、自分の財布から出すべきなのである。

んで、お昼。

……………い、今おこったことをありのまま話すぜ。

「伊織、あずささん、小鳥さんをお昼に誘ったら、出掛ける頃には

全員集合していた。何を言っているか分からないと思うが、オレも何をさ（以下略）

※ ※ ※

営業。

その基本の一つは「断らない」ことである。断った仕事は他に流れるし、何よりも次の仕事の声が掛かりにくくなる。仕事を依頼する方も目算や予定をある程度組み立ててから声をかけてくる。断られればその予定の変更が必要だし、そして次はそうならない様にしようと思うのが普通である。だから「断らない」ということの意味は、重い。

「あー、えっと二十五日ですか。となると再来週の水曜日ですよ。ね。ちょっと待っていただけますか。今予定確認しますんで……」携帯電話を頬と肩の間に挟んで、予定を確認する為に手帳を捲る。振りをして、心の中の手帳をつらつらと捲る。手元にある現実の手帳は既に開かれていて、予定表が開かれている。二十五日は、黒い。だから今のは、心の手帳を検索するちょっとした時間が欲しかったのだ。

「……そういえば、例のイベントってどうなりましたか？　そうですそうです、月末の、はい。それです」

心の手帳に刻まれた情報を元に会話を続ける。雑談を装いつつ話題を横滑りさせていく。

「はい、はい。どうでしょうか、ウチの響とかは？　そうです、前回のあの子です。ダンス得意ですし……え？　はい、二十五日の件は一旦保留で。はい、大丈夫です。それではまた改めて打ち合わせるということで、はい」

最後に他愛のない雑談をしてから、携帯電話の通話が切れる。

ふう、上手くいったか。

営業の基本は「断らない」。しかし実際には断らざる得ない場面にも遭遇する。その時どうするか。答えは「代案を提示する」。つまりこちらが断るのではなく「相手に」変更してもらうのである。

それを成功させる為には代案が魅力的である必要があるし、その為には相手の状況を確認しておく必要がある。心の中の手帳には相手のディレクターの仕事状況がメモしてある。最近の仕事の方向性、スタッフとの雑談などから得られた情報など……。

今のは月末開催のイベント内容の変更を提案し、それに連動して二十五日のイベント内容を変更させるという高等テクである。結果としてこちらから断ることなく、都合の付かない仕事依頼を無かったことにして、かつ新しい仕事を獲得した（予定）のである。

オレは少しぬるくなったお茶を啜りながら、満足げに一息つく。うむうむ、これが営業の醍醐味だろうか。なかなかここまで綺麗に成功することは稀だが、それだけに感慨も深い。いやまあオレは営業ではないのだが……良い仕事をして悪い気はしないのである。

再び携帯電話が鳴る。今日の着信音は「神SUMMER!!」である。基本、売り出し中の楽曲をローテーションで着信音にしている。これもささやかな営業努力である。

「はい、765プロです」

自然と声も軽やかになる。今日は仕事先からの電話が多い。地道な努力が少しずつ実を結んでいく。そんな感触がある。

「え、っ……二十五日ですか」

現実と心の手帳を捲る手が、ぴたりと止まった。

『仕事は少ないほど、重なるものである。』

―無名の営業戦士』

……数分後。

仕事を断っているオレがいた。黒いホワイトボードへの道は遠く、
険しい……。

※ ※ ※

「ねーねー、プロデューサーさん机に突っ伏しているけど、どう
したのかな？」

事務机が並べられた一角の隣、ソファとテレビが置かれたリビング
的空間。そこからプロデューサーの方を覗き見ていた春香が頭を引
っ込め、ひそひそ声で囁く。集まっているのは気まずそうな顔をし
ている真と雪歩、何か満足げな表情で食後のお茶を嗜んでいる貴音、
そして亜美真美である。

「……さすがに全員で奢ってもらうのはマズかったかな。高そうだ
ったよねあの店」

「で、でもプロデューサーさんは奢りだって言って払わせてくれな
かったし……」

「それが男子の矜持なのでありましょう」

「うーん、いおりんに聞いたら『男ってホントにバカよね』って怒
ってたよん」

「兄ちゃん、とても高給取りには見えませんかなあ」

「うーん、大丈夫かなー」

春香は再び事務机のある方へ振り返る。机の上に突っ伏していたプロデューサーはよろよろと上体を起こし、一口お茶を啜ってから再び電話を掛け始めていた。ややして、鞆を片手に机を離れる。

「ちよっと打ち合わせに行ってくる。今日のレッスン予定は分かっているよな？」

「はいーっ、大丈夫ですっ」

春香を筆頭に五月雨に返事をしていく。プロデューサーはそれを聞いてから、終わったたら顔を出すからちゃんとレッスン受けるんだぞ、と言いつつ慌ただしく事務所を出て行った。その後ろ姿を真と春香が見送る。

「最近外出多いよね」

「うんー」

まあ営業の為の外出は前から多かったが、売り込みの場合は当然というか昼間の外出が多い。対して打ち合わせの場合は深夜まで続いたり早朝からということもあるから、朝から深夜まで出突っ張りということもありえる。

プロデューサーの財布の中身も心配だったが、身体の方も心配といえど心配である。人間、身体が資本である。春香たちには体調管理をしてくれる人もいるが、プロデューサーにはいない……気がする。あれ？ 結婚してるんだっけ。ちゃんと食事しているのかな。まさかカッププラーメンですませているとか……独身だとしても、自炊出来るのかな。

事務所で一番最初に出勤して最後に退勤するのは小鳥さんだが、二番手はプロデューサーである。退勤に関しては小鳥さんより遅い事も多い。そんなに朝早く夜遅いのなら、ちゃんと睡眠時間は取れているのだろうか。通勤時間は……はどのぐらいなんだろうか。

「……そういえば」

プロデューサーさんのこと、結構知らないことが多いよね。
春香はそう思った。

第二話 いなくっても世界は回る（前編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第二話 いなくっても世界は回る（前編）

「無尽合体キサラギ」というマイナー番組がある。

某ケーブルテレビ局の情報番組内で放送中の、五分程度のコメディドラマである。

高校の文化祭並のチープな作りと、際どいパロディネタが極一部の層に受けているとかで、不定期ながらもコツコツと続いている。一話限りの予定が四話に延び、現在は六話目である。撮影用のムービーカメラもホームビデオから、ちゃんとした放送局用のものにレベルアップした。放送時間延長の話もある。この作品を企画した自称監督は「このウェーブに乗って、いずれは劇場公開だ」と息巻いているらしいが、さすがにそれは夢見すぎだろうと思う。……思うよな？

その自称監督は古くからの765プロのファンだそうで、そういう訳で今はアイドルを引退してプロデューサーをしている律子も特別出演している。まあロボット役なんだが。律子いわく『本人出演でないから（しぶしぶ）引き受けた』とのことだが、その代わりのあのロボットであるわけで、端から見るとどっちが良いのかよく分からない気がする。いいのか、アレで。本人出た方がマシなんじゃないのか。

ローカルかつニッチ過ぎて、765プロの知名度向上への貢献度は微々たるものだが、定期的なお仕事というのは営業的には有り難い。普通のサラリーマンをしているとつい忘れがちになるが、定期収入とは真実有り難いものである。ははー。

『恐れひれ伏し、崇め奉りなさいっ！』

そして春香が悪役、しかも親玉である。最初、手書きの配役表を受け取った時には一体どういう判断なんだと思ったが……。こうして撮影の様子や実際の映像を見てみると、この配役を思いついた人間は天才なのかなあと思わなくもない。斜め上の方だが。

今日も児童公園に、春香の高笑いがこだまする。

青い空、暖かな春の風を受けながら、オレはしみじみと思った。

……なんか、生き生きとしているなあ……。

※ ※ ※

アイドルのお仕事が少ないからと言って、営業の仕事が少ない訳ではない。

定期的なお仕事がない分は飛び込みやスポット（一回限りのお仕事）をこなしていく必要がある訳で、その獲得の為に日夜飛び回ることになる。この業界における営業の打率というものがどの程度なのか、まだ日の浅いオレにはよく分かっていない。が、業種を問わず営業というものは、世間が想像するほど高くないということだけは言えると思う。プロ野球の四番バッターの打率が三割越えであるが、凄腕の営業マンでもその率は出ないだろう。オレの打率はいえプロ野球選手であれば今季限りで引退間違い無しな数値であり、打率が低ければ足りない分は数で補うしか無く、数で補おうとすれば時間を消費するしかないわけで、ここに営業インフレーションが成立する訳である。いやデフレか？

まあそんな訳で、睡眠時間と休暇が限りなく削られているオレだ

が、さすがに全く休み無しで働ける体力は持ち合わせていない。倒れる前に、今週の日曜日は久方ぶりの休みを取ることにしたのである。

……あー、一応言っておくが、私はプロデューサーであって営業ではない。そろそろ空しくなってきたが、主張することに意義があるのである。

目が覚める。

カーテンの隙間から、一筋の光が室内を横断して床から壁にかけて線を引いている。

目覚まし時計を掛けずに寝たから、今何時かよく分からない。目を凝らして……十時、ぐらいか？ 眼鏡をかけてないので時計の針がぼんやりとしか見えない。まあ九時以上十一時未満だろう。

あー、うー、さてどうするか。起きるか、もう一眠りするか。

折角の休みだから起きるのもよし、折角の休みだから惰眠を貪るのもよし。今、選択の自由がここにある。自由って素晴らしいなあ……結局。

選択の自由を行使する幸せに浸りながら睡魔という強制的な選択により、惰眠をもう少し貪ることになった。

※ ※ ※

日曜日といえば高校は休みである。

天海春香は、通勤通学の為に朝はまだ明け切っていない時間に起き

るのが日課である。東京から少し離れている場所に在住している為、中距離電車での通勤通学に時間が掛かるからである。母親と一緒に弁当を用意して、朝食を食べて、空が少し薄明るくなった頃に自転車を出掛ける。

今日は少し違う。日曜日ということで母親はまだ寝ている。春香は一人台所でお弁当の準備をするが、仕込みだけをしてそれをバスケットに収める。簡単な朝食を食べた後、いつもの時間に出掛ける。制服か私服か、少し悩んで私服にした。

自転車で最寄り駅へ、中距離電車で東京都内に入り、山手線と地下鉄を乗り継いで765プロのあるビルの上に到着する。朝日はすっかり昇っている。コンビニで菊地真と萩原雪歩と合流し、一緒に事務所に向かった。

「えっ？ プロデューサーさんの住所を？」

音無小鳥は少し驚いた風で、春香たちに振り向いた。そこには春香を筆頭に真と雪歩が顔を揃えている。三人とも今日はお仕事無い組であり、世間的な休日でもある。そういう時彼女たちは学生らしく事務所に集まって自習などをするところがある。だから今日もそうなのかと思っていた。

「はい、最近プロデューサーさん忙しくしてて、ちゃんと食事しているのかなーと思って」

春香は満面の笑みで、三人で作ったお昼ごはんですー、と両手で小さなバスケットを掲げてみせた。なるほど。三人が給湯室に集まっていたのはそういう訳だったのねー。

プロデューサーさんも765プロの社員である。住所やその他の情報は当然把握している。しかし昨今は個人情報保護等々が五月蠅く叫ばれるご時世である。親しき仲にも礼儀あり、勝手に教えて良いものかどうか。

……という型通りの思考を一瞬だけした後、小鳥はそれほど厚くはない社員台帳を寸毫の躊躇いもなく取り出していた。春香ちゃんたちのプロデューサーさんを労いたいという気持ちは尊重したいし、むしろ後押ししてあげたい。大丈夫よ、春香ちゃん。勝手に住所を教えたなー、なんて文句を言う人じゃないと思うし、もし言ってきたらそれは春香ちゃんたちの心尽くしを無にするってことよね。小鳥、そうになったら……ふっふふっ。

「はい。分かっていると思うけど、誰か他の人に教えちゃだめよ」
一通りの注意事項を言い含めたのち、小鳥はプロデューサーの住所をメモ書きにして渡してあげるのであった。

※ ※ ※

「……朝日町の1945番地、だって」

「意外と近くなんだ」

春香が開いた地図のコピーを真が横から覗き見る。

765プロの最寄り駅から地下鉄で二駅。駅からは歩いて十分ぐらいで朝日町界限に到着する。大通りからは少し離れていて、細い路地と古びた住宅やアパートが立ち並ぶ一角である。人気はあまりなく、しんと静まりかえっている。東京といえば雑踏というイメージが、ここには無い。

手元の地図を見ると、大雑把な番地は書いているが十番台の地番までは刻まれていない。とりあえず1900番地まで来たので、あとは表札や電柱に書かれている番地を見ながら歩いていく。

細い路地。

アスファルトは敷かれているが、車が通れる幅ではない。道の整備

も杜撰なのか、道のあちこちに掘り返して埋め直した後がパッチワークの様に続いていく。その隙間から、道草が顔を出していて、それは近隣の住居の薄暗い庭の緑と合わせて都心では貴重な緑を提供している。そんな風にも見える。

「1930……1935、6……1940……あ、あれ？」

春香の足が止まる。

順調に近づいていた1945番地が、突然1300番台へと変わってしまっている。念の為次の電柱まで足を伸ばしたが、今度は900番台となってしまった。

「こ、これは……」

「春香ちゃん春香ちゃん。地番だと順番に並んでいないことが多いから……もっと細かい地図ないよね？」

雪歩の言葉に春香は首を振る。雪歩は区役所に行けば地図が……とぶつぶつ呟いている。いわゆる丁番号で記される住所表記と違い、地番はその番号が整然と並んでいないケースが多々ある（だから住所表記が導入されたともいえる）。この朝日町もそのケースの一つである様で、1945番地に近づきはすれど一向に辿り着く気配が感じられない。

雪歩は親の職業柄こういうことには詳しそうだったが、今手持ちの地図だけで解決するのはやはり難しい。

「よし、こうなったら！」

春香は住所を書いた紙を握りしめ、丁度前方の十字路の角から現れた人物に向かって駆けていった。角から現れた人物は少し白髪の交じった黒髪の年配の女性で、サンダルにスーパールのビニール袋を下げている。どうみても地元に住人と思われる風体だ。

「あ、あのすみません。この辺りで朝日荘ってアパートご存じないでしょうか？」

春香は深々とお辞儀をしてから、年配の女性に紙を差しだして道を尋ねた。女性は少し警戒の表情を浮かべたが、春香の笑顔を見てニコリと微笑み返した。春香と紙の間で視線を一往復させた後、口

を開いた。

「W h y？」

「ふ……ふわい？」

英語だった。

手振り身振り、そしてなぜか歌を一曲披露した後、ようやく意思疎通に成功した。大まかな目的地の場所を教えてもらい、チョコレートのお菓子を一つ貰った。たぶんお捻りのつもりなのだと思われるた。

「音楽は国境を越えるって本当だったんだね！」

「いやあ、それはどうかと……」

「むしろなぜ歌うことになったんでしょうか……」

約二名は微妙な表情をしていた。

入手した情報によると、朝日町の1945番地は私道しか通っていない区画の中心にある様だった。実際に行ってみると、どう見ても人の家の庭にしか見えない所を抜け、砂利道を細かく二度ほど曲がった先にあった。

二階建ての、灰色の壁をしたアパート。それが朝日荘らしかった。壁は元が白で汚れて

灰色になっている感じで、全体的に古びている。この区画自体古い建物が多いが、それに輪を掛けた感じである。

目的地は二階、203号室。春香たちは軋む外階段を上り、二階の一番奥にあるところの部屋を目指す。外廊下は狭く、しかも各部屋の洗濯機が設置してある。ごろんごろんと音を立てているその脇を擦り抜け、203号室のドアの前に立つ。表札を見るが、名前は無く空欄になっている。呼び鈴があったので押して見たが反応は無い。壊れてい……

「……あっ」

突然ドアが開いた。驚いた春香が短い声を出す。突然開いたことに驚き、そして出てきた人物に驚いていた。出てきたのはプロデューサー……では無く、男性でもなく、女性だった。年齢は春香たちより上、大人の女性だった。三十には見えないが、すっぴんの顔が逆に色っぽい。そして薄着……下着姿ではないが、限りなくそれに近い。そんな姿で顔を出す女性を見て、逆に春香たちの方が顔を赤らめた。

しばし無言の時間が流れ、はっと我に返った春香が慌ててお辞儀をする。

「あ、あのっ！ こちらは……こちらは……」

住所は間違っていない。だからここはプロデューサーさんのお宅のはずで、そこから顔を出したこの女性は身内……とは限らないが、少なくとも関係者だと思われた。まずは挨拶と、ここがプロデューサーさんのお宅であることの確認を……。

「ぶ、プロデューサーさんのお宅でしょうか？」

「は？」

女性は思いつきり怪訝そうな顔をし、真と雪歩はずっこける。

（春香っ、名前で聞かないとダメじゃないか）

（ででも……真ちゃん、プロデューサーさんの名前知っている？）

（それはっ！ それは……プロデューサーは……プロデューサーは

………雪歩は？）

（ええっ?! し、知らないですう。てっきり春香ちゃんが知ってるんだとばかり……）

（プロデューサーさんは……プロデューサーさんだよねっ!）

ひそひそ話がエンドレスする。

「よく分からないが……眼鏡掛けた男のことかい？」

呆れ顔で傍観していた女性だったが、終わりそうにないので助け船を出す。

「そ、そうです」

「眼鏡掛けて、背は普通で、頼りがいのありそうではない感じで、

でもちよつとはやるかも知れない感じの、でもやっぱりダメっぽい
みたいな」

「よく分かりませんが、でも何となくそんな感じですよ。」

「ふむ」

春香たちの顔を見回してから、女性は何か納得した様子だった。諦
め風のため息を一つついてから、半開きだったドアを大きく開いて
みせる。

「ヤツならちよつと出掛けてるよ。すぐ戻ると思うから、なんなら
中で待ってるかい？」

第三話 いなくっても世界は回る（後編）（前書き）

「THE IDOLM@STER^{アイドルマスター}」はバンダイナムコゲームスの原作・著作物であり、当作品はその二次創作小説です。作品中の諸設定はテレビアニメ版を参考にしておりますが、公式設定とは一切関係ございませんのでご注意ください。

第三話 いなくっても世界は回る（後編）

都内に住んでいて便利なのは、どこへ行くにも近いという点だ。

この業界、なんだかんだいって都内に事務所やらスタジオやらが数多く存在する。もちろん関東近郊や地方もあるが、移動距離・時間・コスト等々を計算した場合、まず都内を押さえることのメリットは大きい。特に移動コスト、いわゆる交通費の問題は地味に大きい。自腹となれば尚更だ。

久しぶりに遅い朝食を食べた後、オレは外出した。服装が背広でない外出は本当に久しぶり……思い出せないぐらいに過去の話だと気づいて、少し遠い目をする。

最寄りの地下鉄の駅から山手線に出て、ぐるりと半周する。駅前のコンビニで適当に缶ジュースを数本見繕った後、目的地へと足を運ぶ。駅前からは少し歩くが、それほど離れている訳ではない。五分、十分ぐらいか。目的地へ直接は行かず、ぐるりと散歩がてらに遠回りをする。辺りはオフィスビルが多く、駅前にはよくある歓楽街は駅の反対側に集中している。近くの公園も綺麗に清掃されている。周辺環境は良好といってよく、なるほど、765プロの事務所からは少し遠いがこのダンススタジオにアイドルたちを通わせている理由のひとつが分かった様な気がした。

「あら、765プロのプロデューサーさん」

スタジオの受付に顔を出すと、カウンターの中にいた女性が声を掛けてくれた。いつもお世話になっているインストラクターの人だ。

振付師でもある。今の765プロのアイドルたちのレッスンをデビューー当時から見てくれているので、彼女たちとの付き合いはオレより長いことになる。

「どうしたんですか？ 今日はお休みですよね」

「いやー、今日はちょっと見学に」

差し入れの缶ジュースの入った袋を手渡しつつ、少し雑談に興じる。

日曜日、午前中ということもあってか、スタジオの利用者は疎らだ。基本ここのスタジオの利用者はプロが多いが中にはアマチュア、趣味でスタジオに通っている人もいる。ちょっと失礼してドアの小窓から中を覗くと、小柄な女性がダンスの最中だった。跳躍の多い激しいダンスで、素人目にはプロ顔負けの腕前である。なんだか勿体ないなあ、と思ってしまふのは早くも職業病に罹り始めているのだろうか。あれほどの技術で趣味でしかないというのは、つまりただダンスが好きで、かつそれで完結しているのだろう。

そういえば、真と響もダンスが得意な子たちだ。

彼女たちにとってダンスとは何なのだろうか。もちろんダンスが好き、身体を動かすのが好きなのは間違いない。その上で、アイドルを目指す人間とそうでない人間がいる。いや、より正確に言えば、無数に存在する多種多様な目標の内の一つがアイドルという道であり、また趣味という道なのだろう。

『ダンスが得意で、もっともっと大勢の人に見て貰いたいです!』
記者からのインタビューで、真がそう答えていたのをふと思い出した。

……なんだか、こう、もやややる。明確な言葉として存在しながら、しかしその内容は曖昧ではっきりしない。少なくともオレには明確に説明できない。新米営業ま……プロデューサーとして色々走り回ってきて、その中で感じていたほんの少しの違和感。それは多分、明確な目標を描けていないからだ、と思う。言葉としてはある。目指せトップアイドル。そう、言葉としてはこれほど明確なのに、オレの心は足の踏み場を探して迷走している。

……アイドルって、何なんだろうな……。

※ ※ ※

室内は雑然としていた。

古びたアパートで、トイレはあるがお風呂は無い。小さなキッチンと小さな卓袱台があるリビング相当の部屋と、南側にあと二部屋。片方の部屋には女性モノの下着が干してあり、もう片方は男性用の下着が干してある。女性は吊している紐ごと女性用下着をもう一つの部屋に投げ込んで襖を閉め、床に散乱している本やら何やらをざっと片付けてて小さなテーブルを出した。

「ちよっと待ってな」

女性はそういつて春香たちをテーブルの周りに座らせてから、すぐそばにある小さな台所に立った。お湯を沸かしてティーパックの紅茶を注いでいく。少し緊張した春香は出しそびれたバスケットを抱えたまま部屋の中に視線を泳がし、そして窓際に置かれた本棚に落ち着いた。

『誰でもできるマネジメント入門』

『他人には聞けない文書の書き方』

『流行通信 vol. 101』

『実用装飾辞典』

『その時歴史は動いたかも知れない』

などなど、高校生の春香にはあまり縁のない本がずらりと並んでいる。そして一番下の棚はアイドル写真集で埋め尽くされていた。春香でも知ってる名前から、なんだか時代を感じさせる名前まで多種多様だ。

「はいよ。すぐ戻ってくると思うから」

女性が戻ってきて、不揃いのカップに注がれた紅茶が振る舞われる。お茶請けは煎餅のアソート。来客用の組み合わせには見えないが、

女性は何事も無いように紅茶で煎餅を食べているので、ここではこれが普通なのかも知れない。とりあえず春香は煎餅には手を付けず、紅茶だけ頂く。

「あのー、こういったらあれですけど
そう切り出したのは真だった。」

「いきなり押しかけてきて、しかも面識なくって、でも、こうやって家の中に入れていただいて、あのー良かったんでしょか？」

「まあ、そう珍しいことじゃないからね」

「そ、そうなんですか……」

珍しくない。それは、こうやって女の子が訪ねてくるということですよ。あれ？ プロデューサーさんは新米でしたよね。ということとは、その女の子たちって誰？ しかも珍しくないって、あたしたち以外の765プロのメンバーが？ いや小鳥さんの話だとあたしたちが初めてって……あ、あれ？

「あんな男のどこが良いんだか」

「ははは……」

三人の笑い声は固い。彼女たちの中でのプロデューサー像は大崩壊中で、急遽再建中だ。しかもその再建は大混乱中で、例えるならピカソかダリかという造形になっている。

「まあこうやって訪ねてくる人間がいるってことは、上手くやっているってことかな」

「上手く？」

「あいつが仕事を、ね。仕事仲間なんだろう？」

「は、はい」

仕事仲間と言われれば、そうだ。なんというか、そういう意識は不思議となかったが……単なる仕事仲間と言われると違和感を感じるが、かといって適切な言葉は見当たらない。「仕事仲間」と「年上の先輩」と「一般的なプロデューサー」のいずれでもなく、たぶんその真ん中辺りにいそうな感じだ。

「どどどと言うご関係なんでしょうか？」

春香は思い切って女性に聞いてみた。色々言葉が抜けているが、勿論プロデューサーと女性の関係である。

「恋人……じゃないかな。たぶん単なる腐れ縁」

さらっと言う女性。そこには気負いも何もない。

「血は水よりも濃しっていうけど、親兄弟との関係って切っても切れないんだよね。それと比べて、あいつとの関係は水ってところかな。そこにあるのが当たり前で普段はは気にもとめない。でも何だかんだで必要な存在だったりする」

「それって親兄弟と、どう違うんですか？」
真が聞く。

「血は身体の中だけど、水は身体の外にあるっていう点かな」

「肉親と他人の違いってことでしょうか？」

勿体ぶった言い方に雪歩が応え、女性は満面の笑みを浮かべる。そうそう、察しの良い子は大好きよー、と頬摺りする。

「まあ必要というのはちょっとあれかな。正確に言えば……不可欠ではないし、絶対に必要と言い切れるほど重要でもない。いなくっても世界は回る。でも……」

女性は窓の外を見る。窓の外の風景の下半分は隣の家の屋根が占め、上半分は遠くのビルが塞いでいる。

「たぶんアイツの居ない部屋で見る朝日の色は、違うんだと思う」
女性の視線に釣られて三人も窓の外を見る。それはどこにでもある東京の空で、東京の空だった。ちらりと女性を見て、それでたぶん女性は何か別のものを見ている。それだけは理解出来た。

「まあ君たちにはまだピンとこないかな」

少しはにかんだ様な微笑み。どこか達観した感じのある女性が、初めて見せた感情だった。それを見て春香は、ようやく本当に聞きたかった質問に辿り着いた。

「あの……貴方は、元アイドルなんですか？」

女性は少し目を丸くして、そして悪戯っぽく口元をつり上げて答えた。

「さあ？ それはご想像にお任せするよ」

しばらく他愛のない雑談に興じていると、ドアが開く音がした。三人と一人がすぐ背後の玄関に振り返ると、ドアの向こうから眼鏡を掛けた男性がぬっと姿を現すところだった。

※ ※ ※

「あら？ プロデューサーさん」

小鳥がドアの開く音に振り返ると、意外な訪問者がそこにいた。今日は休みのプロデューサーさんである。うーん、私服姿のプロデューサーさんも何か新鮮な感じがするわねー。もう少し、もうちょっと美形さんなら私の妄想り……はっ？ んー、こほん。

「うふふ、春香ちゃんたちに会えましたか？」

「春香？ 今日は休みじゃないのかな」

「え、あつと、そうなんですけど」

あれ？

「そうそう音無さん。これお願いします」

そう言ってプロデューサーは一枚の書類を差し出した。タイトルは……『住所変更届』。

「えっ？」

765プロも小さいながらも会社である。残業申請、交通費支給、年末調整……色々な届出書類がある。それら进行处理するのが小鳥の仕事の一つであるから、プロデューサーが差し出した書類がどうい

う内容のものは熟知している。タイトル通り、引っ越し等で住まいが変わった時に会社に申告する為の書類だ。

「お引っ越しされたんですか？」

「はい。といっても随分前……ここに入社する直前なんですけど、会社には元の住所で入社手続きしていたのをすっかり忘れてましてたぶんオレの住所、朝日町になってますよね？」

「え…、ええっ」

確認しなくても分かる。というか今日確認したばかりである。地図込みで。

（あれ？　ということは春香ちゃんたちが向かったトコロは……。）
小鳥はたらりと冷や汗を流した。

※ ※ ※

「おー、おかえり」

「ただいまー」

女性が眼鏡の男性に声を掛け、男性がそれに応じる。サンダルを脱ぎ、両手に持ったスーパールのビニール袋を下ろして一息つく。今、室内で動いているのは女性と眼鏡の男性だけであり、約三名は固まっていた。その視線を眼鏡の男性に注いだまま。

眼鏡は掛けている。

そして男性である。その点においてはプロデューサーと合致するが、しかしどうみても共通点はそこだけだった。筋肉隆々の肉体は誰よりも逞しく男らしい。顔つきも強烈な意志の強さが感じられ、どこか部分を切り出して見ても「頼りがい」というオーラを発散している、真の後ろで雪歩は完全に石化していた。

「おー、お客さんだよー」

「あー、どうも。ごゆっくり」

男性がぺこりと挨拶をする。そしてそのまま三人の横を通り過ぎて、台所で冷蔵庫に買い物してきたものを片付け始める。

「あー、それは私がやるからさ。ほら」

女性は男性からスーパールの袋を取り上げると、強引にテーブルの前に座らせた。春香たちと男性が面向かい、ちょっとした沈黙の後、とりあえず同時に会釈をする。

「えーと、初めまして？」

「ははは初めまして、天海春香です！」

「……初めまして？」

台所で女性が目を丸くしている。女性は春香を見て、春香は男性を見て、更に男性から女性を経て戻ってきた視線に対して、春香はにへらと笑うことしか出来なかった。

「えーと、あの、あれ？ 初めまして……です」

十分後。眼鏡の男性と女性は、プロデューサーが引越した後に入居した赤の他人だという結論に辿り着いた。春香たちが何度も頭を下げ、女性は笑って「まあそういうこともあらあね」と言っているにすぎなかった。

「ああ、そうだ」

女性は何かを思い出したのか、一旦部屋の中に戻り騒々しい音が聞こえたのち、また外に出てきた。その手には一通の封筒が握られている。

「これ、前の住人さんに渡してよ」

「手紙……ですか？」

「うん、宛先不明で戻ってきたらしいんだよね。」

裏面にはプロデューサー……と思われる男性名とここの住所が書か

れている。表の消印は数ヶ月前。まだ彼が765プロに来る前だ。宛先の住所は東京ではなく地方で、住所に並んで書かれた名前は、女性のものだった。

女性と別れ、最寄り駅にまで戻ってきたところで見慣れた顔を見つけた。何やら渋い顔をしてこちらを見ている。眼鏡を掛けた男性だ。

「あ！ プロデューサーさんっ！」

春香が駆け寄り、真と雪歩がそれに続く。その眼鏡を掛けた男性は、今度こそ春香たちが知っている男性であり、プロデューサーだった。「まったく、来るなら連絡ぐらい入れろ」

「いやー、びっくりさせようかと思って」

「……私たちがびっくりしちゃいました……」

真が照れた様に頭を？き、雪歩の顔はまたちよつと青かった。

「えへへ、お茶ごちそうになっちゃいました」

「何やってんだか」

ま、何事もなくて良かったよ、と言ってプロデューサーは春香の頭をくしゃりと撫でた。春香はにへらと笑い、片手を上に突き上げた。「それじゃあ、今度こそプロデューサーさんのお家にレッツゴーですわね！」

「いいっ？ も、もういいんじゃないか？」

「そうは行きません。ここまで来て引き下がったら女が廃るっってもんですよ」

真が男らしく奮起する。いやそれは女と男、どっちが廃っているのか分からないんですが。

結局三人に押し切られる形で、プロデューサーの現住所へと向かった。地下鉄で三駅。前のアパートより、765プロの事務所にちよつとだけ近い。ワンルームのマンションでかなり築浅な物件だ。ドアを開いて中に入ると、小綺麗に片付けられた室内が見える。男性にしてはよく片付いている方か。几帳面とっていい。室内に洗濯物が干されているということもなく、一人住まい。窓の外に広

る空も、東京の空だ。

「……普通だねえ」

「うん、普通だね」

「……ですう」

何かすごいがっかりした表情で三人が呟く。

「お前達はオレに何を求めているんだ……」

こうしてようやく、少し遅めの昼食が始まったのだった。

※ ※ ※

春香たちが帰った後、オレは一通の手紙を見ていた。正確には封筒を、だが。差出人は自分。そして宛先不明の印が押されている。

つまりこの手紙は、宛先には届かなかったということだ。宛先は地方で、ある女性に宛てたものだ。

届かなかった。

まあそうなる可能性は高いと思っていた。正直住所に関してはかなり古くてあやふやな情報だったので、たぶん転居か何かしたのだろう。別段、必要な手紙では無かった。だから届かなくても良かった。少し残念な気持ちと、ほっとした気持ちが錯綜している。

その手紙を、机の引き出しにしまう。

もう今となっては何の意味も無い手紙だ。再度出し直す気もない。ただ、今この時期に戻ってきたことには意味があるのかな、と思う。偶然と片付けるにはタイミングが良すぎた。

引き出しに仕舞って、さて夕食の準備に取りかかる。

そうして日々の喧噪の中で、このまま手紙のことを忘れてしまう。そんな気がする。ただ、その中身だけはたぶん忘れないと思う。そ

んな気がした。

手紙の内容は短い。全文を思い出せるほどに。

『もう、アイドルは目指さないのですか？』

それはたぶんオレの一生で、一番短い手紙だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5331y/>

やがて花咲く彼女たちへ

2011年12月2日17時49分発行